

一回だけの練習ではないけない

旧制十八期 鍋谷 鐵 巳

創立七十周年を迎えられたことはご同慶にたえません。心からお喜び申し上げます。往年の「生徒」の一人として回想記の掲載依頼がございましたので、雑文で恐縮ですがあれやこれや想い出しながら書くことにいたしました。

今から四十三年前になりますか、一九五二年（昭和二十七年）、この年は戦後日本が初めて参加したフィンランドのヘルシンキで行われたオリンピックの年です。戦後は第一回のロンドンオリンピックがありました。日本は不参加でした。理由はいろいろあるが、敗戦の傷跡が大きく大変な食糧難にあえいでいる時で、農家へサツマイモを買い出しに行くような状態を想像していただければおわかりいただけるかと思います。オリンピックには不参加でしたがお腹をすかしながらも各選手とも練習は熱心に行っていたと思います。現在のJOC委員長の古橋広之進さんが試合の度に世界記録を更新したのもこの頃だと思います。従って次のヘルシンキオリンピックが日本にとっては戦後初めての参加となったのです。

何事に於いても最初は大変なことが沢山ありますが、最初だったからこそ、感激も大きくひとしおということもあるものです。今年は福

井県鯖江市で体操の世界選手権があります。国際大会が次から次と組みこまれ大会慣れをしているのと違って、オリンピックに対する国民の関心は大変高かったように思います。当時は特別な人を除いて、外国へ行くということは大変なことでした。日本人の海外渡航が自由化されたのは確か一九六四年つまり十二年後と聞いております。当時飛行機に乗ったことのある人は、私の回りには余りいなかったように思います。スポーツ選手にしても、戦前のロスアンゼルスやベルリンのオリンピック大会の出場選手は船でアメリカ、ヨーロッパへ渡ったと聞いております。

私達は食べ物の無い時代に育って腹をすかして練習をやり、そして運良くオリンピック選手になれたのです。さあそれからが大変でした。フォークとナイフを使って食事をとる外国生活は大丈夫なものだろうか。フォークは右手か左手か。左利きの人はそれではどうか。三人集まるとそんな話になり悩みました。まだ見ぬ外国への期待よりも、出発が近づくにつれ悩みの方が深刻になったのを覚えています。出発前一度神田YMCAに行つて実際にビフテキをいただきながら、フルコースのたべ方を教わりました。でも正式にはこれが一度だけでした。一度だけの未熟な経験が早々にして結果として表れる時がやってくるのでした。

出発は羽田国際空港からSASのチャーター便でした。飛行機に乗るのが初めての選手ばかりですので、出発予定の時間がとくに過ぎているのにタラップの下での記念撮影が次から次へと引きもきらず、

どのくらい遅れて出発したのでしょうか。私のアルバムの中にも羽田出発の写真が一番枚数が多いのにも思わず笑いが出ます。飛びたつて三十分もしない時にフォークとナイフの食事が出ました。お腹はみんな空いているのですが、一様にみんなの顔が曇ったようでした。気のせいかも知れませんが。不安なのです。フォークとナイフの食事は一回だけの練習でしたから音はさせないように注意されていたのですが、それだけに呼吸まで止めて切るものですから、ビフテキ一口たべるまでに相当疲れたことを覚えております。失敗はこれから始まるのです。ビフテキ切りも心配した程ではなく三口ほど食べて、少し自信がついた所です。こし大きめにナイフを入れて思いきり力を入れて手元へ引きました。フォークで押さえてあった箸の大きめの塊が二メートルくらい先の通路の真ん中へ飛んでいきました。

ビフテキの落ちる音はエンジンの音よりも大きかったのを覚えております。何事も練習は一回だけはいけません。ヨーロッパへ行くのに当時は南回り（シルクルート）しかありませんでした。まだ沖縄もアメリカの占領下にあった時です。羽田を発って沖縄、マニラ、バンコック、カラチ、バスラと給油してヨーロッパ最初の地ローマへ着くのです。ローマへ着くまでの飛行機の中でも、今なら考えられない失敗が次から次とありました。救いといえはそれ等の失敗が他の人の迷惑にならなかったと思えるのがせめてもの救いともいえましようか。若いということはいいいことですね。失敗も多かったけど、希望も沢山持つことが出来た気がします。又希望と悩みは背中合せにな

ってもいるようです。そしてどんな小さな悩みとでももっと誠実に取り組んできたなら、自分の人生というものが、もっといいねいに生きてこられたのではないかとこれを書きながら考えました。悩みは希望とともに心を深めて行く大切な糧かも知れません。

オリンピックに出場できたことは、名誉でもあり、努力したことが報いられたことで良かったとも思うが、運も良かったと思いました。

今の体操の試合は六種目（床運動、鉄棒、平行棒、鞍馬、吊輪、跳馬）同時に試合展開するルールですが、当時は一種目ずつ同じ種目を全選手が演技し終わると又次の種目を全選手が……のルールでしたから、オリンピックの開会式前に一種目終了しておかないと閉会式までに全種目終わらない計算が出たようでした。抽選の結果、日本はトップグループに入り更にそのトップチームが日本、その又日本チームのトップが「私」と監督から聞かされた時は体に電流が走ったような興奮をおぼえたのを今でもハッキリと覚えております。ヘルシンキオリンピック大会の体操の試合は「私が幕を切っておとしたんだ」と、成績は良くありませんでしたが、今も私の誇りの一つとしてひそかに心にとamiこんでおります。

スポーツにも確かに教育と同じく時代性があると思います。昔は強かったのと言ってしまえば現在指導でご苦労なさっている先生方には、お気の毒と思います。何が変わってきたのか、それなら今後どうしたらいいのかを考え研究し、強くするための努力をしていたのかなといけないうし期待もするものであります。今は次から次と難

度の高いものに挑戦していかないと一〇点はとれない仕組みになっています。試合を見ていると思わぬアクシデントが起こる。これでもいいかと何時も考えてしまいます。

ご存知の方も沢山いらっしゃると思いますが、五輪体操の金メダリストでルーマニアの生んだナディア・コマネチさんは、十四才の時モントリオールのオリンピックで一〇点満点を出して華麗な演技で世界を魅了しました。ごほうびが沢山出たのを断わって自由の国で新しい人生を築きたいとアメリカへの逃避行に成功しました。「難度を競う競技だけが体操じゃない。成熟した大人の表現から体操の素晴らしさを知って欲しい」とオーケストラに合わせて床や平均台で舞うミュージカルショーをやって評判が高いと聞いています。ミュージカルショーがいいかどうかは別として「難度を競うだけが体操じゃない」という考え方には私も同感です。

能代が生んだゴールドメダリスト小野喬さんは財団法人日本体操協会の副会長に選任されました。世界に向かって発言出来る立場にもなったわけで、体操の方向性も含めて大いに期待したいところです。みなさんも大いに声援を送ってください。古代ギリシャオリンピックは勝者はオリブの枝で編んだ月桂冠をもらい銀も銅メダルもありませんでした。今のスポーツ選手はファッションの先端を行くが如く身を装う。勝つことが又コマースシャル、アマへと続いてもいるようにも見えます。今さら古代オリンピックの精神に戻れと言うつもりはないし、発言の場もないのですが、日頃気になっていることの一端を記しまし

た。

創立以来七十周年という長い間風雪に耐え数多くの人材を世に送り出してきた伝統は今後も限りなく続きひきつがれて行くべきものでしょう。社会環境が変われば人の価値観も変わります。古いだけいいのではなく、時代の変化をとらえて時代が学問、スポーツに求めているものは何かということに対して答えていかななくてはならないと思います。とりとめの無いことをあれやこれやと書きましたが、この機会を与えてくださったお陰で自分の今までの生きざまも見つめなおし、反省もし、なつかしい人々を想い浮かべることが出来たことを感謝いたします。益々のご発展を心よりお祈りいたします。

(三田体操会会長)

体操に生きる

新制二期 小 野 喬

創立七十周年を心よりお祝い申し上げます。

私は、昭和十九年四月に能代中学へ入学し、昭和二十三年の学制改革により、新制高校第二学年に編入学となりましたので、卒業年月は、昭和二十五年三月の、新制第二期生となります。

旧制能代中学の体操部の諸先輩は、今の国民体育大会に相当する明

治神宮運動大会の体操競技中学の部で、全国優勝をしております。小学校高学年から体操競技に興味を持って練習に励んでいた私には、どうしても能代中学に入学し、体操部に入学し、先輩のような立派な体操選手になりたいという夢を抱いていただけに、能代中学合格発表に自分の名前が掲載されていたことに、小躍りして悦んだことが昨日のことのように思われます。

憧れの能代中学体操部に入学したものの第二次世界大戦の戦況が激化し、運動をしている余裕もなくなり、私達も防空壕堀りや松根油づくりに動員され、体操競技の練習ができなくなりました。

昭和二十年八月十五日、日本は戦争に敗れ、一時は、運動部が、どうなることかと心配されましたが、間もなく、体操部の復活が認められ、練習に励むことができるようになりました。

上級生や先輩の指導のもと、伝統ある能代中学の体操は、厳しいスパルタトレーニングを積み重ね、昭和二十一年秋に開催された第一回国民体育大会では、中学の部で、鍋谷鐵巳先輩が個人総合で第一位、私が第二位、富浪良夫先輩が第三位と、能代中学が第三位までを独占し、戦後の能代の体操の夜明けが始まったのでした。

体操器具は、戦前の古いマットと飛び箱と、諸先輩が、血豆で染めた鉄棒しかありませんでしたが、第二回国民体育大会の金沢大会でも私が個人総合で優勝し、能代の体操の復活ぶりを全国の体操愛好者に知らしめることができたのでした。

第三回国民体育大会福岡大会は、学制改革により高校の部となり、

連勝を期して会場に臨んだのですが、国体開会式典に参加するために、体操競技の会場である戸畑から総合開会式の博多へ出かける満員列車のデッキに腰かけていた私の左足が陸橋のボルトにぶつかって大怪我をしてしまい、私は大会を棄権せざるを得ず、後輩が必死で頑張ってくれたが、地元福岡に敗れ、第二位の成績になってしまいました。この時の監督の先生が、中村史朗先生（中村栄喜先生のご尊父）で、奥様とご一緒に懸命の看病をしていただいたのに、試合に出られなかったことが、今でも、申し訳なく思っております。

左足の裂傷がひどく、しばらくは歩くことも困難で、これから、体操競技が続けられるのかと懸念されましたが、幸いにして三ヶ月位から、走ることができるようになり、安心しました。怪我の治療中は足を使う運動を避け上腕や体上部の運動は練習していたことが幸いして、体操の技自体は、それ程衰えずに済んだので、第四回国民体育大会の神奈川大会の勝利を目指して、頑張ることができました。

高校三年生の私には、高校最後の大会だけに、代表選手である後輩の二年生の柳谷洋君（故人）、梅田卓美君、一年生の檜森丈策君（故人）、鈴木正義君等と、チームワークを固め、団体一位と、戦後の第一回インターハイ大会の優勝を飾ることができたことは、高校時代の最高の快挙でした。以来、能代高校の全国制覇が、当分の間続くことになります。

私の旧制中学・高校時代は、体操の他に、陸上、バレーボール、バスケットボール、野球、庭球、卓球部等も県大会で優勝し、東北大会

や全国大会で活躍しております。大学合格者も、国立大学や、有名私立大学に結構入学していることからしても、文武両道の教育方針が、徹底されていたと言えましょう。

私には、体操一筋の高校時代だっただけに、時間的余裕がなかったとはいえ、読書に親しみ読解力をつけておけばよかったことを、今頃となって悔やんでおります。このように文章書きをさせられると、つくづく、感じさせられます。でも、体操競技を通じ習得できた創造性や感性が、社会人となってからも役立っていることは、大変有難く思っております。私ども、体操部が全国制覇をしたときには、全校生徒が集まってくれて、祝勝会を開いて下さったことも、とても、印象に残っております。ダンチョネ節で、「能中（高）体操部はネ、いつでも勝ーつよ、全国制覇もネ、何ーんのそのダンチョネー」と唱っていると、胸にずーんと来て、感慨無量になりました。

私は、東京教育大学（今の筑波大学）三年生の時に、一九五二年の第十六回オリンピックヘルシンキ大会の日本体操代表選手として、鍋谷鐵巳先輩と一緒に選ばれましたが、代表選手になるための予選会の都度、能代から、大勢の先輩が応援に駆けつけて下さり、最終予選会をパスした瞬間の歓声が、いまだに脳裡にはっきりと焼き付いております。

戦後、間もなく、能中体操部が復活し、体操器具もない頃には、先輩から丸太棒を貰って来て鞍馬をつくり、鍛冶屋の先輩には鉄を曲げて貰って、吊環をつくって天井からロープで吊し、平行棒は、大工の

先輩にと手づくりの器具で練習に励んだことが、オリンピック大会出場の栄光を手にすることができ、メルボルンオリンピック大会では、鉄棒で、日本体操選手として、初めてのオリンピック大会での金メダル獲得に繋がったのだと思っております。

私の座右の銘は「百折不撓」の精神です。物の豊富な時代に育った若い人達は、物を大切にする気持ちが薄くなっていると思われるが、バブルの弾けたこれからの社会は、より厳しい社会が待ち受けているかもしれないことを自覚し、物品を大切にする習慣を身につけてほしいと思います。

創立七十周年を契機として、現在から、将来に向けての質の高いビジョンを掲げて、日々、充実した日常生活に励んでほしいと切望するものであります。
(財団法人日本体操協会副会長)

アトランタオリンピックを目指して

新制三十一期 鈴木 裕美子

七十周年を迎えた母校に対し、心よりお祝いを申し上げ、これからのますますのご発展を祈念いたします。

私は一九六〇年生まれの三十五歳です。ちょうど母校の半分の年数を生きて参りました。卒業したのは、今から十八年前になると思います。

す。校舎が樽子山から、高墙へ移ったばかりの頃でした。建物は出来たばかりでしたし、周囲も、道路やグラウンドはまだ地面が落ち着かず、風が強い時には土埃が舞うという荒々しさでした。

生家は山本郡峰浜村で、卒業した中学校は、沢目中学校です。今は統合されて、峰浜中学校になり、もう残っていません。それに比べると、小学校のほうが残っていて、校舎こそ新しく立て直されましたが、岩子（いわこ）小学校を卒業しました。今でも県内では珍しい、オーブン教室を取り入れたことで知られている小学校ですが、当時は、全校児童数が四十七名でした。一緒に卒業した同窓の人数は、女三人に男七人と、全部で十人でした。現在は、当時よりも少ない人数だと聞いています。

過疎地で僻地で複式学級という、一般的価値観から見れば、絶望的な状況での小学校時代が、私にとってはなよりの自慢です。なぜならば、本当の教育を受けたと思うからです。

岩子小学校へ赴任していらした先生の中には、あまり僻地なので嫌になってしまった方もいたに違いありません。しかし、六年間の半分を担任して下さった塩谷啓一先生は、違っていらいしかったです。先生は人数の少ない私たちに、こうおっしゃっていました。「お前達くらいしか人数がないのに、テストしなくちゃどういう子どもか分からないようじゃしかたない。」

当時すでに問題となり始めていた、テストや宿題による、いわゆる詰め込み学習と正反対のやり方のような気がします。したがって、あ

の小学校時代ほど、のびのびと楽しく何でもできた時期はなかったと思います。勉強しろと強制されたおぼえはありません。スポーツも同様に、厳しいクラブ活動はありませんでした。というより、人数がいなくて出来ませんでした。しかし、今の子どもたちと比べれば、野山を駆けめぐっていたと思います。

つい先頃、全世界的な自然遺産として認定された白神山地のブナ林も、当時は、誰も何にも言ってくれる人などいませんでした。が、私たちは先生に連れられて、キャンプに出かけたりして、上流の川の水をじかに飲んだ経験もあります。住んでいる者にとって気付きにくい本物の自然を、私たちに理解させてくれたのです。現在の私は、そんな小学校時代の影響をうけついで現在まで来たとってもよいくらいです。

世間での価値観に縛られず、私たちは私たちの小さな世界で、自分達に出来る限りの努力をし、絶対にあきらめないということを、塩谷先生から論されました。いつも先生は、山の子だからとか、人数が少ないからとか、外から蔑視するようなことに対して、自分達自身が卑屈になってはならない、岩子の子は岩子の子の権利を主張するべきだと、私たちに指導してくださいました。たとえ数が少なからうと、基本的に、どこの子どもも平等に扱われるべきであり、自分達が今居る場所を、どこよりも大切な所だと気付かせてくれたのです。

小学校でも、中学校でも、そして、高校でも周囲が向いている方向に対して、なんとなく自分だけが浮いていると思いつつも、それでも

全然気にしないというような性格は、自己中心的であり、悪く言えば傲慢で、わがまま、おやまの大将です。しかし、もしこの性格でなければ、高校の三年間を、スキー部員として存在しきれなかったのではないかと思います。

能代高校は当時、女子生徒が百人くらいいませんでした。クラブ活動にも女子の部はありませんでした。したがって、ただでさえ受験第一のムードの中で、運動クラブの活動を、女子で、仲間もなく一人という状態は、そうとう厳しく、しかも、周囲の理解も協力も期待できそうにない、それが現実だったと思います。

今でこそ、オリンピック出場者と呼ばれる立場の私ですが、二十年前の私は競技者のきの字もない、ただの人でした。ただ、父は長く陸上競技者として、また、指導者として活動していましたし、母も同様に選手の経験を持っていました。その二人が私たち、姉と私が生まれる頃からスキーを始め、地域でのスキークラブを発足させてがんばっていましたので、幼い頃から、なんとなく生活のなかでスポーツ活動は、当たり前という家庭の雰囲気がありました。

ですから、父も母も、いつの学校時代でも、どんな形であれ、クラブ活動に対して悪くいうはずもなく、だまってい守っていてくれました。直接にどうこうという口出しもあえてしないという方針だったのでしょうか、とにかく黙ってみていてくれました。

ですから、私が一人で練習を始め、あんまりつまらなくて、もう高校なんか行きたくないともらした時も、自分でやると言って始めたん

じゃなかったかな、くらいのことをやんわり言うだけでした。私も、その言葉で気付かされ、ああそうだったと思い直したことがあります。

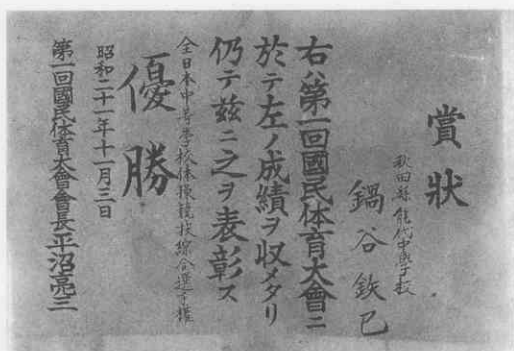
スキー部の練習は、夏は放課後に陸トレと称して、学校から柏子所の神社くらいまで、あるいは、逆川方面へランニングをするというのが日課でした。ほとんどの生徒が授業を終えて、それぞれ塾だなんだと帰ろうとする中、一人練習にかけようとする私を見て、変な奴という顔をする人もいました。しかし、父や母以外の皆に理解されていなかったわけではありません。顧問の高橋一成先生、小栗富英先生には大変お世話になりました。

花輪高校スキー部に混ざってもらった冬の冬の合宿や、地元開催の運動もあって、高校三年の時にインターハイに出ることが出来ました。時期が時期ですから、高橋先生に、大学は他の奴に悪いから受験するなと大真面目に言われたことは忘れられません。

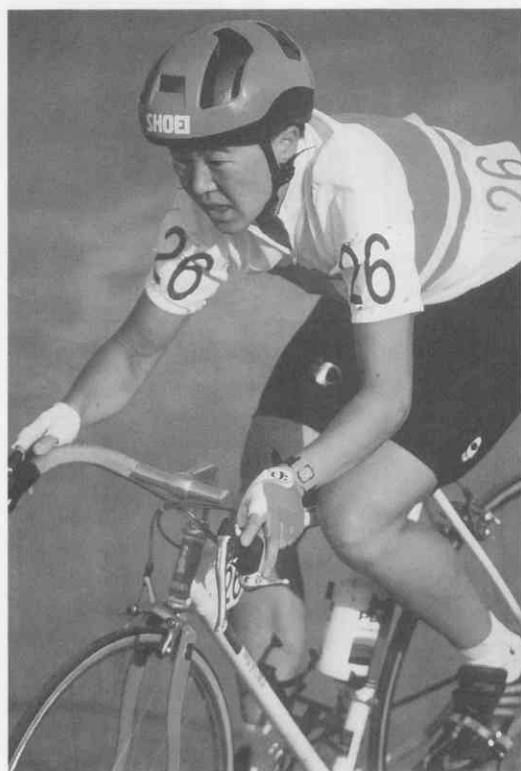
最後になりましたが、三年前のバルセロナオリンピック出場の際は、皆様からお祝を頂き、本当にありがとうございました。この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。来年は、いよいよ百年目の記念すべきオリンピック、第二十六回アトランタ大会が開催されます。日々精進して代表を目指し頑張りますので、どうぞこれからもよろしくお願い致します。



小野喬選手（中央）



鍋谷鐵巳選手



鈴木裕美子選手

お寄せ
いただいた
色紙

自然

旧制第九期
高橋 正太郎
1994.5.31

旧制九期

高橋 正太郎

人間万事

旧制第十六期
寺山 清利
平成二年一月一日
寺山 清利

旧制十六期

寺山 清利

成珠
珠微

旧制第一期
腰山 巳代治

旧制一期

腰山 巳代治

天命安
盡人事

旧制十二期
花下 哲夫

旧制十二期

花下 哲夫

玉珠

芳賀 高弘

旧制十六期

芳賀 高弘

疾風知
勁草

旧制四期
坂本 定夫

旧制四期

坂本 定夫

十七八が
二度候かよ

旧制十四期
平野 清太郎

旧制十四期

平野 清太郎

健康は
すべてではない
しかし健康がなければ
すべてはない
三田 元悦
1994.5.31

旧制十六期

三田 元悦

過去に鑑み

現在に働き

未来に生く

平成六年
五月十日
旧制第四期卒業
武藤 裕宣

旧制四期

武藤 裕宣

和てなくて積

旧制十五期
越前 龍夫

旧制十五期

越前 龍夫

在るが
まゝに

平成六年九月
岩森 榮助

旧制十七期

岩森 榮助

平成六年五月二十日

和

昭和十年
旧制第六期卒業生
野呂 邦彦

旧制六期

野呂 邦彦

遠ざくら
尽きせぬ流れ
栄代の

旧制十五期
吉田 信一
一九四七年

旧制十五期

吉田 信一

不動心

一九四四年五月
鍋谷 鉄巳

旧制十八期

鍋谷 鉄巳

誠をつくして
時をまて

旧制九期生
神馬 恒成
1994.4.29

旧制九期

神馬 恒成

戦中学徒
青春五年

旧制十五期生
渡辺 亨
(二男孝一)

旧制十五期

渡辺 亨

夢と
希望を
廿二世紀へ

旧制十八期生
村木 良二

旧制十八期

村木 良二